

第7号のゲスト投稿者さんは、3年担任、野球部顧問、相談係の高橋佑太先生です。
今回はちょっと授業みたいな雰囲気ですよ！

「どんなときも人生には意味がある～フランクフルに学ぶ」

さあ倫理の授業を始めましょう。

「この人生にいったいどんな意味あるのだろうか」この哲学的な問いにあなたは答えられますか。少し考えてから、この先を読んでください。

自分では、どうすることも出来ない苦難や災難が降りかかってきて、こんな人生、最低だという心境になる人もいるでしょう。また、人生というのは不思議なもので、悪いことが立て続けに起きたりします。こんな状況の時、人は、人生にこう問います。「なぜ、私がこんなつらい目に逢わなくてはならないのか。こんなことにどんな意味があるのか」と。

しかし、オーストリアの精神科医※フランクフルはまったく異なる視点から人生をとらえ直すことを提案します。私たち人間がなすべきことは、生きる意味はあるのかと「人生を問う」ことではなく、人生のさまざまな状況の中で、その都度、「人生から問われていること」に全力に答えていくこと、ただそれだけだということです。

フランクフルの言葉を引いてみましょう。

「ここで必要なのは、生きる意味についての問いを百八十度方向転換することだ。私たちが生きることからなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることが私たちからなにを期待しているかが問題なのだ、ということを知り、絶望している人間に伝えねばならない。」(フランクフル 『夜と霧』 池田香代子訳 みすず書房、129頁)

人生に期待するのではなく、人生に何を期待されているのか。状況はそう易々と変えられるものではありません。いま、ここで、わたしは何ができるのか。フランクフルの言うように、人生からの問いに全力で答えることが重要ではないでしょうか。

そして、このような状況だからこそ出来ることがたくさんある気がします。お金や物の価値は日々変動し、すぐ自分の手元からなくなってしまう。しかし、知識や経験は奪われることも無くなることもありません(自分にも言い聞かせています…)。いまはまさに学びのチャンスかもしれません。

学校が再開するとき、皆さんはどうなっているのでしょうか。希望に満ちた顔で、元気に登校してくる皆さんに会えることを、私は期待しています。

※ヴィクトール・E・フランクフル(1905-97)

オーストリアの精神科医。ユダヤ人であるフランクフルはナチス・ドイツによって強制収容所に送られ、みずから生き地獄を体験すると同時に、極限状態に置かれた人間たちを目の当たりにした—その記録が『夜と霧』である。

【紹介した書籍】

フランクフル 『夜と霧』 池田香代子訳 みすず書房

